九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

幕末歌壇の諸相 ： 中島広足の目から見た幕末歌壇

吉良，史明
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/19772

出版情報：語文研究. 107, pp.45-60, 2009-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

幕末歌壇の諸相

――中島広足の目から見た幕末歌壇――

吉良史明

はじめに

天保から幕末に至る歌壇は、佐々木信綱『近世和歌史』[注1]に縣門、鈴屋派、江戸派、桂園派等の流を汲んで、それぞれ特色ある歌風を有した歌人、或はそれらの流派以外にたつ歌人が、單に江戸京都等の文壇に於いてのみならず、各地に輩出して、さながら百花亂れ咲く趣を呈したのが、徳川末期の歌界の大勢である。

と論じられるごとく、和歌結社が江戸、大坂、京都の三都のみならず全国に興り、加納諸平編『類題鰒玉集』[注2]を始めとする数多の類題和歌集が出刊され、近世和歌史上活況を呈した時代である。

一方、幕末歌壇に関した研究は、辻森秀英『近世後期歌壇の研究』[注3]等に主たる歌人の歌論、歌風の紹介、ならびに実態解明を試みた論考数編が備わるものの、昭和六十年代以降進捗しておらず、鈴門、江戸派、桂園派三派の諸相、またその影響が如何に地方歌壇に波及したものか、いまだ明らかにされているとはいい難い。それは、盛んな交流がなされたが故に歌壇の実態が極度に混迷を極めていたことに起因するといえよう。例えば、如上の『近世和歌史』に

而して、それらの歌人の中には、單に一派の風を學ぶのみでなく、或は他派の風をとり入れ、或は自己の風を發

揮して、多かれ少なかれ特色を出した歌人が少なくなかつた。

と記されるごとく、近世末期の歌人は、派閥の垣根を越えて他派とも親交を深めており、特定の一派に終始することなく三派各々から少なからぬ影響を受けていたことが指摘される。すなわち、一歌人の歌壇史上の位置を特定することさえ困難な状況にあるといえるのである。

他方、かくのごとき研究の閉塞状況は、従来の論考が中央から地方を照射する視点のみに偏重していたこともまた一因としてあり、地方から中央を視野に据えた歌壇史の構築が俟たれる。(注4) 筆者は以前、かかる問題意識のもと、幕末の長崎を舞台に活躍した歌人中島広足（寛政四年――文久四年）の歌論を明らかにすべく「広足と宣長――『後の歌がたり』に見られる宣長批判の内実――」(注5)を発表し、ごく一時期鈴屋社中への傾倒を示すも江戸派の歌論が広足の生涯に亘り堅持されたことを指摘した。しかしながら、同稿においては鈴門への歩み寄りを示した経緯が論じられていない。

そこで本稿は、広足が初めて鈴門に接近した文化末年から文政初頭にかけての動向、言説に着目しつつ、鈴門に傾倒した経緯、背景を明らかにすることを以て、地方歌人広足の目から見た鈴屋社中、ならびに中央歌壇の様相の一端を提示するものである。

一　広足の人となり

先ず始めに、拙稿「刊本『さゝぐり』の成立――長崎橿園社中の台頭――」(注6)と若干重複するが、論述の都合上、広足の略歴、ならびに人となりを概観しておきたい。

中島広足。寛政四年（一七九二）三月五日、中島五郎平惟規の長男として肥後熊本城下に生まれる。初め嘉太郎・惟清。後、春臣・広足・弘足と称す。号は橿園・黄口・田翁（たをさ）。享和二年（一八〇二）七月、父の死没により齢十一にして家督を相続。以後、御番方、御小姓役を命ぜられ、傍ら二条派の歌学を修める。藩主細川斉茲から寵愛され、将来を嘱望されるも、文化十二年（一八一五）春、病のために致仕。同年前後より文事に没頭した広足は、橘千蔭門人の江戸の一柳千古に入門、歌文を学ぶ。一方、故郷熊本にては本居宣長の高弟長瀬真幸（まさき）に師事し、主として国学の教えを請うた。さらに、文政五年（一八二二）の初度長崎来訪より、同地の歌人青木永（なが）章（ふみ）、近藤光輔と親交を深めた広足は、両人を介して、和歌山の本居大平、加納諸平、長澤伴雄、京都の香川景樹、江戸の

橘守部、伴信友、平田篤胤を始め、諸国の歌壇の主催者たる国学者、歌人に親炙し、自らもまた長崎の地に橿園社中なる和歌結社を興して一家を成した。

かかる交流の幅の広さからか、天保期以降成立の類題和歌集には悉くといえるほど広足歌が入集している。例えば、柿園派総帥の加納諸平編『類題鰒玉集』一篇から七篇に計二二三首、篤胤門人の鈴木重胤（しげたね）編『近世名家歌集』[注7]に計八九首、鈴門の長澤伴雄編『類題和歌鴨川集』[注8]太郎編から五郎集に計一七七首、足代弘訓（あじろひろのり）門人の佐々木弘綱編『類題千船集』[注9]一編から三編に計二八六首が入集する等、枚挙に暇がない。すなわち広足は、江戸派のみならず各派と交流し、当代歌壇において一目置かれる歌人であったといえよう。

さて、その広足の人となりとして注目すべきは、無類の論争癖であろう。前掲「広足と宣長――『後の歌がたり』に見られる宣長批判の内実――」において、宣長歌論を辛辣に批判する様を示したが、広足の批判は鈴屋のみに止まることなく、桂園派、堂上派、さらには江戸派にまで向けられた。例えば、桂園一枝論争[注10]の際、癖が高じてか、広足は江戸派、桂園派双方の説の消長を論じた一書の上木を企て、盟友の光輔から次のように厳しく諭されたほどである。

一　扨又愚存小将申述候は、彼桂一枝、大幣あるにて、大に景樹直打（ねうち）下り申候。夫に又、門人氏曄とかいふ者の弁出候はゞ、師光彪も又直打下り可申候。夫に又、公の入念候判出候はゞ、又公を人おとしめ可申候。桂一のあしき所はいはいでも人しる所なり。大ぬさのあしき所も勿論に御座候。氏曄の弁いらぬことなり。くれぐも御とめ可然候。[注11]

（彌富破摩雄編『桂園遺稿』下巻所収、広足宛光輔書簡、五車楼、明治四十年）

新たな争いの火種となることを危惧した光輔の忠告を入れ、出刊することこそ差し控えたものの、参戦を企図していたことは、渦中の書である中川自休『大幣』[注12]に無数の広足書入れが施されており、さらにごく一部は、天保十四年（一八四三）刊の随筆『橿のくち葉』三巻一冊に収載されることからも明らかである。以て、広足の論争癖がうかがい知れる逸話といえよう。

かくのごとく論争を好み、特定の派閥に与することなく批判的に各派の様相を見据える広足の目に当代歌壇の実態は如何に映ったか、次節より検討に入る。

二　文化末年の広足　――堂上批判――

広足の学統に関しては、従来江戸派の千古、鈴門の大平、同じく鈴門の真幸、桂園派総帥景樹の何れの門人であるとも論じられてきた。しかしながら、数多の肥後細川藩士が藩祖幽斎よりの二条派歌学を修めていたごとく、同藩士である広足もまた若年の折に同派の教えを墨守していたこと、堂上歌学を批判した『宇奈為乃須左備』（文化末年頃成立　写本一冊）[注13]なる書の序文に記されている。

おのれいとわかゝりし時、近体家のをしへをなにがしの翁にうけて、其伝へを崇びしほどは、歌はたゞ雲の上人のみしり給へるものとおもひ、万葉集といへば、今の人のとくべからぬものとおもひ、其ふりまなぶ人は、聞もしらぬことやうなることを、歌にもよみて、其論はた、みだりに人をそしるわたくしごとゝのみ、おもへりき。[注14]

同書の表、裏見返しに書付けられた右の記述は、自らの歌学びを回想したものであり、当初広足は「近体家」すなわち堂上派の流れを汲む某に初学の教えを受け、真淵始め万葉調の国学者の詠歌には批判的であったことがうかがえる。国学者として後に名を馳せた広足の歌学修養は、堂上派のそれから始められていたのである。

そして如上の記述に続けて、広足の筆は、堂上歌学から脱却し国学を志した経緯へと進められる。

かくて、集ども見もてゆくまに〳〵、ひとりおもひけるやう、人はとまれかくまれ、われはいにしへをひろくまなびて、其よしあしをいかでみづから見わきてしがなとおもひなりて、かの翁にもいはず、こゝろみに万葉まなびせし人のあらはせる書どもを見しに、はじめて其論のたけたることをしりぬ。かくて、とし月にまなびつる、やう〳〵いにしへをあきらめしりてなん、今は昔のおろかなりしことも、いたくはぢおもはれ、かの翁がつたなきをしへをたふとびしことも、いみじうくいおもはれける。

「万葉まなびせし人」が如何なる人物であるか、断定こそできないものの、広足の経歴から推して、師筋にあたり『万葉集略解』[注15]の著者である千蔭、もしくは『万葉集佳調』[注16]を著した同藩の真幸等が該当するであろう。ともかくも、国学者の著述を試みに一読したことが契機となり、国学に目覚め、以

後堂上派に批判的な姿勢を示し始めた様が見て取れよう。

ところが、国学を志向して以後も、広足の詠歌には以前よりの堂上風の影が色を落としていたこと、自らも次のごとく自覚していた。

しかはあれど、まづいるものむねとなると、から人のいへる詞をおもへば、なほむかしのならひのなごりもてあると、つねにこゝろづかひせらるゝに、こたびさるついでありければ、いさゝかそのことわりをわきまへぬ。

「まづいるものむねとなる」[注17]すなわち堂上派の教えが自らの歌の奥底に潜むことを危惧した広足は、堂上歌学と国学の相違を明らかにすべく同書を著し、堂上風の払拭を図ったといえよう。

かくて広足は、同書本文において堂上歌学の論駁を試みた。その批判は、主に堂上派の権威主義と語学の稚拙さを的として、殊に真淵、宣長等の著述に拠りつつなされており、興味深い。一例を示せば、一丁表冒頭の

当時万葉風と称して歌よむ輩は、みだりに制度をやぶり、近体家の人の歌といへば、貴人の歌をも必是を誹謗す。其罪かろからず。

という堂上派歌人の国学批判に対しては、国学の入門書ともいうべき宣長『うひ山ふみ』[注18]をおよそ二丁に亘り援用して、歌の巧拙に貴賤の与らないことを論じて反駁しており、本居国学への傾倒が明らかであるといえよう。かかる傾向は、文化末年頃の広足に顕著であり、同十二年十一月に著された『古今集三鳥三木弁』[注19]もまた、宣長『玉勝間』[注20]等をもとに古今伝授中の三木三鳥伝授の非を論じたものである。

そして語学に関しても、堂上派が国学者の仮名遣いを否定し、定家仮名遣いを称揚することに対し、

すべて、いにしへの仮字（かな）のたゞしき事を、はじめて見出たるは、難波の契沖法師也。其後、賀茂翁、本居翁など、つぎ〳〵に古言のまなびをおこされたるより、今は古言のかなは、たれもよくしれる事也。猶くはしくは、古事記伝、古言梯、呵苅葭などいふ書に、是等の事は見えたれば、よく見てさとるべき也。

と、契沖、真淵、宣長を経て大成された国学が古代の仮名遣いを解明したこと、宣長『古事記伝』[注21]等の書を目にすべきこ

とを記して、批判した。おそらくは、記紀、万葉等の書に用例を索め、緻密に考証を加える国学の姿勢に感化されての言であろう。

さらにまた、堂上派のテニヲハ伝授に関しては、次のごとく反駁した。

また、テニヲハのとゝのへなどは、近体家にては、伝授などいへど、とゝのへるはまれ也。其外、くさ〴くのテニヲハの変格ある事をもしらず。こは先年、本居翁、詞玉緒てふ書を著し、古今のテニヲハの、とゝのへのかぎりをさとされしより、テニヲハの事は、はじめて明らかになりぬ。

堂上派の詠草にはテニヲハの使い様を心得たものが稀であることを論じる一方、広足は宣長が『詞の玉緒』[注22]を著してから「テニヲハの事は、はじめて明らかになりぬ」と褒め称えており、これもまた本居国学への傾倒ぶりをうかがわせる。殊に同書に関しては、文化十三年（一八一六）二月二十四日成立の『淡海僧海量随筆中抜書』[注23]十三丁欄上に「此玉の緒は、いとたふとき文にて、歌よまむ人は、必是をもて、てにをはをたゞすべき也」と朱筆書入れを施したほどであり、広足の愛読ぶりが知れよう。

かくのごとく、文化末年の広足は堂上風の詠歌からの脱却を試みるにあたり、宣長の著述、殊に『詞の玉緒』を自らの歌学の支柱としていたことが明らかである。一方、同書の如何なる点が広足をしてかく心酔せしめたものか、また江戸派の歌論を生涯に亘り堅持した広足が、何故江戸派の千蔭、春海等の著述に拠らず、宣長のそれに依拠したものか、定かではない。そこで次節以下においては、以上の二点に関して検討を試みたい。

三　広足と『詞の玉緒』――鈴門の諸相（一）――

『詞の玉緒』は、大野晋編『本居宣長全集』第五巻（筑摩書房、昭和四十五年）の解題に

『詞の玉緒』は内容が確實で平明であったから理解しやすく、この後をついで古典のテニヲハの研究に入るものが頗る多かった。『玉緒繰分』（義門著）、『玉緒延約』（玄裡庵日善著）、『玉緒末分櫛』（長野義言著）、『詞の玉緒補遺』（中嶋廣足著）、『玉の緒縒添』（中村尚輔著）、『助辭義一覧』（橘守部著）などは、或いは宣長の擧例を更

に補いたいと願い、或いは宣長の研究を平易に解説しようと志した著作である。これらは、『詞の玉緒』の影響がいかに大きかったかを示すものということができよう。

と論じられるごとく、所謂玉緒学派なる一派が形成されるほどに多大な影響を与えた書といえ、広足もまた宣長の後塵を拝して『詞玉緒補遺』(注24)なる一書を編んだ。同書は広足晩年の安政七年（一八六〇）に大坂の秋田屋市兵衛方より出刊されたものであるが、若年時よりの『詞の玉緒』研究の集大成であること、巻頭に附された「おほむね」の一節に詳しい。

○詞玉緒といふ書は、歌よむ人のてにをはの学びするに、かならずよまではえあるまじき、いみじきたからのたふとき書にしあれば、つねに文机のかたはらをはなつべからず。かれ、おのれもいとわかゝりしより、何くれの歌、物語のふみどもを見もて行まに〳〵、めづらしきてにをはの活(はたら)きなどあるをば、やがてかのふみに引あはせつゝ、さながら書入もし、又もれたりとおぼゆる証歌、またおなじすぢなるをも、今すこしくはへまほしきは、かつ〴〵しるしそへもし、またことにおもひよれることゞものあるは、其ところ〴〵に論らひなどしつるが、やう〳〵かずおほく成ぬるに、いかでこれかきつめて、たれもよむべくものし給へ。初学のともの、いみじきたすけなりとをしへ子どもの、はやくよりいふめるを、さのみも聞すぐしがたければ、をち〳〵書つめて、かゝるふみ巻とはなしつるなり。

右は『詞玉緒補遺』執筆の過程を物語る記述である。年少の頃より『詞の玉緒』を歌人必携の書と珍重した広足は、歌書、物語を読む折に同書を繙きつつテニヲハのことを考究し、遺漏の証歌、自説等を書入れていたことがうかがえよう。事実、広足ゆかりの鎮西大社諏訪神社には「広／足」（白文方印 縦一・七×横一・七糎）の印の捺された手沢本(注25)が伝存し、若年より晩年に至る様々な筆跡の広足書入れが施されている。万葉、二十一代集、源氏、伊勢等を始めとする諸書の用例、さらに自らの考証を記した書入れは、大本七巻七冊の至る所に見られ、まさしく同書を座右の書として歌学に勉励する様子を彷彿とさせる。そして、かかる書入れをもとに『詞玉緒補遺』が編まれたこと、如上の「おほむね」に明らかである。

かくのごとく広足が『詞の玉緒』を精読した所以は、ひとえに同書を以て自他の詠草のテニヲハを正すことにあったといえる。例えば手沢本三巻二一丁裏「しもぞ」の項の欄上には

図１　諏訪神社所蔵『詞の玉緒』五巻表紙、一丁表

千蔭

やみもなほ蛍とびかふよひのまはいよすかゝげぬや
どしもぞなき

此しもぞは誤なり。かくつかへるは、古歌にある事なし。

という朱筆書入れがあり、同書所載の例歌と引き比べつつ、千蔭歌「しもぞ」の誤用を指摘したことが見て取れる。

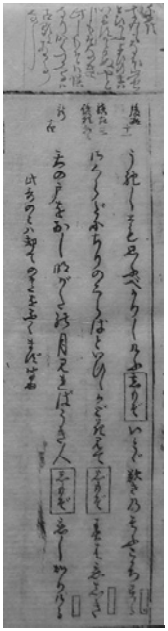

図２　『詞の玉緒』三巻二一丁裏

また、前掲の『檀のくち葉』一巻収載の「こそをしにて受る格」と題した一条においては、桂園一枝論争の的とされた景樹歌「明てこそ見むと思ひし箱崎の波まにかすむ松のむら立」のこその結びをめぐり、新後撰巻八「おとにこそふくともきゝし秋風の袖になれぬるしら川の関」他二首の証歌を挙げて次のごとく評した。

此ふくともきゝきしとながめなれにしとの二首は、翁の

玉の緒にも出たるを、難者はわすれたるなるべし。猶、こその結びのさまぐなること、玉の緒に大かたあげつくされたるを、ともすればわすれて、かしらかたぶくる人、光彪の外にもいと多し。

江戸派の秋山光彪が景樹歌のこその結びを難じたことに対し、広足は『詞の玉緒』にこその結びがしとなる「おとにこそ」云々の証歌が挙げられていることを示して、光彪説を斥けており、同じく『詞の玉緒』を以てテニヲハの是非を勘考した一例といえよう。

そもそも、広足は宣長詠草のテニヲハを称賛していたこと、前掲『淡海僧海量随筆中抜書』十一丁表に次のごとく記されている。

加茂翁と本居翁とのおとりまさりをいはんには、いかにといふに、猶歌のしらべにおきては、加茂翁のかた、はるかにまさりて、其流（ながれ）なる千蔭翁なども、歌はいとよろしかりき。しかれども、本居翁の歌には、ことばのたがへる、てにをはのとゝのはぬなど、書候一つもあることなし。

歌の調べはさておき、広足は宣長の詠草を「てにをはのとゝのはぬなど、書候一つもあることなし」と絶賛していたことが見て取れよう。机上の論のみならず、実詠のテニヲハに『詞の玉緒』の理論を実践した宣長に対し、広足は感銘を覚えたことが推定されるのであり、すなわち同書を歌人必携の書とした所以は、広足がより実践的な歌書としての一面に魅せられたことにあるといえよう。(注26)

さらに、同書のみならず、本居学派の語学全般に傾倒していたこと、数々の広足手沢本から明らかである。例えば、国会図書館蔵の本居春庭（はるにわ）『詞八衢』(注27)は、一丁表右下に「広／足」（白文方印 縦二・四×横二・四糎）の印が捺され、また無数の書入れが施されたものであり、広足の精読のほどが知れる書。同書もまた詠草の語法を勘案するにあたり座右の書として珍重されていたことが、諏訪神社蔵の広足自筆本『桂園一枝抜書』(注28)に次のごとく示されている。

詞のやちまた　河上落葉　語格たがへり　田翁(注29)

羅行活ひたり　山河の岸をひたり（し）て行水にぬるてのもみぢちらぬ日ぞなき

の所みるべし

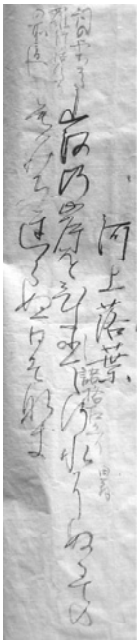

図3　諏訪神社所蔵『桂園一枝抜書』三丁裏

景樹歌二句目の「ひたり」をめぐり、広足は『詞の八衢』に拠りつつ「ひたし」とすべきことを示しており、詠草の添削に本居学派の書を用いた例といえよう。なお、手沢本の書入れをもとに『詞八衢補遺』[注30]が編まれたことも、如上の『詞玉緒補遺』と事情を同じくする。

また、諏訪神社蔵の宣長『玉あられ』[注31]は、一丁表に「広足／印章」（白文方印　縦二・〇×横二・〇糎）の印があり、同じく諸書の用例、補説が至る所に書き入れられたもの。江戸派の村田春海と千蔭が同書の論駁を試みた『玉あられ論』[注32]も同社に蔵されるものの、書入れは一箇所のみに止まり、好対照をなす。なお、文久元年（一八六一）六月刊の広足『玉霰窓の小篠』[注33]は宣長説を祖述し発展させたものといえ、語学に関して鈴門に重きを置く広足の姿勢がうかがえよう。

四　鈴屋歌論への批判　――鈴門の諸相（二）――

他方、鈴門の歌論、歌風に関して広足が批判的な見解を示していたこと、拙稿「広足と宣長――『後の歌がたり』に見られる宣長批判の内実――」に示すところであるが、論述の都合上、広足『海人のくゞつ』[注34]所載の「歌よむこゝろばへ」を再度掲出して概観しておきたい。

千蔭翁の詠歌論のしりへに、鈴屋翁評詞をそへられて云々。上古の人の歌は、つくらず、かざらず、たゞこゝろにおもふまゝをよめりとて、今の世に心のまゝによむべきにあらず。今の人のよむは、みな古人のまねをするなれば、これまたみなつくりごと也。されば、たとひ万葉風をよみても、つくりごとなれば、其つくりごとの中に、いろ〳〵のたがひあるなれば、人々心のむかはむにしたがひて、古のつくりごとをまねぶべき也。云々。

とある。此翁の歌のといはれしは、いつも此こゝろばへにて、ことに玉小櫛のうち、又石上私淑言（いそのかみささめごと）などにも、かへすゞ〳〵いはれたるを、たれもうべなはぬ事にて、は

やく春海が歌論消息にも、もはら此事をあげつらひ、木下幸文が櫛のあかにも、つばらにこれをわきまへたれば、今さらいふべきにもあらず。

右は宣長歌論への当世評を綴り、以てそれへの批判を試みたものである。広足が当代の反響として掲げた「春海が歌論消息」ならびに「木下幸文が櫛のあか」の二書は、各々成立の事情、そして論駁の焦点を異にするものの、同じく宣長歌論を駁した書である。前書は、真淵追悼の古風歌集『八十浦之玉』[注35]の編纂をめぐり江戸派と鈴屋社中が期せずして書信上の論争を展開した折の大平宛春海書簡『稲掛大平に贈る書』[注36]と同『稲掛の君の御返事に更に答へまゐらする書』[注37]を示し、庶幾する歌風の相違[注38]から鈴屋の新古今主義を批判したものといえる。

一方、後書『櫛の垢』[注39]は桂門四天王の一人木下幸文の著述である。宣長『源氏物語玉の小櫛』[注40]巻二「くさ〴〵のこゝろばへ」に示された歌論を駁したものであり、その批判は宣長が古歌の模倣、表現の優美を説くことに向けられている。師景樹が小沢廬庵の「たゞごと歌」をもとに平明な歌風を提唱していたことから推して、桂園派得意の戦略的な意図が執筆の背後にあろうか。そして広足もまた、かくのごとく当世評の芳しくない様を明記して、宣長歌論を「たれもうべなはぬ事」と酷評しており、如上の『詞の玉緒』を称誉する姿と対照的であるといえよう。

また、長崎市立歴史博物館所蔵の〔広足歌稿〕[注41]は、広足が大平に詠草の添削を請うた書であり、両者の交流の模様がうかがい知れるもの。例えば、七丁裏の「風わたる」云々の詠歌をめぐり次のごとき応酬がなされている。

峰上月

風わたるをのへのすゝきほの〴〵と月にはれゆくうきゞりのそら

うすぎりはるゝ[注42]

焦点は下の句にある。広足が「月にはれゆくうきゞりのそら」もしくは「ふけゆく月にはるゝうすぎり」と詠んだことに対し、大平は四句目を「うすぎりはるゝ」と改め、さらにこれに対して広足は「此なほしも、にほひなくなりぬ。伊勢風不好」と批判を加えた。すなわち、両者の庶幾する歌風が異なることを示すものであり、広足は「伊勢風」謂わば鈴門の歌風[注43]を不服としていたといえよう。

つまり、広足は宣長、そして鈴門の語学は重んじるものの、歌論、詠歌は拒むという一種奇異な姿勢を示していたことが

明らかであり、従来かかる姿が「党派性の克服」[注44]と評される所以ともなっていたといえよう。

ところで、広足自らは歌学と詠歌を峻別したこと、若年の折の著述『檀園随筆』[注45]草稿所載の「近き世の歌人と学者」に明らかである。

賀茂翁の歌は、青出於藍而青於藍がごとく、鈴屋翁の学は、氷生於水寒於水がごとく也。さて歌は、賀茂翁のこゝろをえてよむ人は、千蔭翁より今の大人にいたれり。春海又、これにつぐ。京の蘆庵、おのづから歌にひでたり。契沖は其世にてはすぐれたれど、賀茂翁出でられて後は、さしもおぼえず。此外にもこれかれ聞えたれど、まことに歌の心をえたりとは見えず。今の世は、まして歌とのみおもひて、其さましらぬのみ也けり。さて学問は、鈴屋翁にてそなはりぬ。今の世にもこれかれ聞ゆれど、すぐれたるはなし。歌には其ながれの人は、こゝろことにこそとほかりけれ。

右の章段は、当世歌人、学者評ともいうべきもの。歌人としては、真淵、千蔭、春海、そして「今の大人」と称された千古、さらに蘆庵が一流とされ、一方学者は宣長に如くものはなしと評される。すなわち、広足は詠歌と学問、謂わば狭義の歌学を別個のものとして各派の消長を把捉していたといえ、自らは江戸派の詠歌、そして鈴屋の歌学を継承すること、上述のごとくであった。

五　江戸派から鈴屋へ　――江戸派の諸相――

かく鈴門の歌論は否定しつつも歌学を祖述、発展させた広足が、江戸派の諸相を如何に把捉していたものか、以下においてその一端を明らかにしたい。

諏訪神社所蔵の『琴後集抜書』半紙本一冊は、二丁表に「檀／園」（白文方印　縦一・二×横一・二糎）の印が捺され、巻末に「源春臣」と若年の名が記されることから、文化末年頃から文政初頭にかけての広足自筆写本と目されるもの。同書は、春海の歌文集『琴後集』の抄本であり、末尾に「琴後集のうちの歌の誤をあげつらふ」と題した春海歌文への広足評が附載される。その概ねは語法の誤りを論じたものであり、例えば二一丁表に

○すずみすと山井の水をいくむすびむすべども猶あかぬけふかな

むすべどものむすべにてきれたるを、上にいくのむすびなきゆゑとゝのはず。こはいくむすびもといふ意なれば、かならずもとうけたる詞あるべき也。初句のすゞみすといへるもわろし。こは玉あられに弁あれば、こゝにはいはず。山井の水もいとつまれり。

のごとき批評が展開されている。春海歌「すゞみすと」云々の一首の意は、涼を求めて幾度もわき水を手に掬いとり掬いとりするけれども、それでもやはり満ち足りることのない今日の日であるよというもの。同歌に対し、広足はいくに照応するもが欠けていることを示して批判しているが、これは『玉あられ』の「いく千世もなどいへば、もにて数の多き意になるを、もといはでは、其意にはなりがたし」という言に拠りつつなされたものであり、まさしく宣長の語学を援用して春海の語法の拙さを批判した例といえよう。

そもそも、春海は広足の詠歌の師である千古の師筋にあたり、広足が歌人としての春海を称誉すること、先に示したごとくである。しかしながら、春海が語法に不案内であることに関しては、同じく『琴後集抜書』二三丁表において次のごとく評している。

春海が文体は、縣居翁のふりをまなびて書つと見えて、すがた、いきほひのよろしきもあれど、詞の意をおもひたがへたるなど、いと多し。そは、縣居翁まではいまだおもひえられざりしことゞもにて、本居翁のはじめて考へえられたるより、いとあきらかになりぬるを、猶しひて師説をたてむとして、書たるものなるべし。

右は春海の和文に関しての言。文の趣、力強い筆致は真淵のそれを彷彿とさせると称美されるものの、語法は「おもひたがへたるなど、いと多し」と酷評されており、詠歌と文章の違いこそあれ、叙上の春海歌への批判と姿勢を同じくするといえよう。また、かく春海が語法に稚拙であることは、真淵の学説に固執し、宣長のそれに拠らないが故であるとされる点、興味深い。おそらくは『玉勝間』二の巻「師の説になづまざる事」[注46]をもとにしての発言かと推定されるが、殊に学問に関して本居学派を尊崇する一方、江戸派を軽視していたことがうかがえよう。事実、先述の『宇奈為乃須左備』において、広足は『うひ山ふみ』を始めとする数多の宣長著述を援用するも、江戸派のそれは、わずかに春海『仮名大意抄』[注47]を示すのみであり、学問に関しての両派の消長はかくのごとく把捉されていたことが明らかである。

さて、文化の終わり、すなわち広足若年頃の江戸歌壇の情勢を物語る書簡が、彌富破摩雄編『名家書翰集抄』(注48)に掲載されている。

江戸は歌よみ斗(ばかり)にて、学問は絶えて無之、漸塙検校(はなわけんげう)斗、考索弥以繁昌仕候。格別珍敷新刻物未見及不申候。

文化十三年九月二日付で江戸詰めの真幸から肥後の広足へ届けられた本書簡は、江戸の文人の模様を書き綴ったものであり、殊に春海、千蔭亡き後の江戸派の状況を端的に示しているといえよう。すなわち、広足は江戸派から学び得ない学問を修めるべく鈴屋の門を叩いたのである。

おわりに

以上から明らかなごとく、文化末年から文政初頭にかけて広足が鈴屋に歩み寄りを示した所以は、殊に『詞の玉緒』を始めとする鈴門の歌学書に魅せられたこと、ならびに江戸派の学問の凋落にあった。

江戸派、鈴屋、桂園派の三派と派閥の垣根を越えて親交を深めてきた広足の動向は、従来「党派性の克服」と評される所以ともなり、一見奇異なものとも評されてきた。しかしながら、江戸派の歌論と鈴屋の歌学を継承する広足の姿勢は、翻れば長崎の地から中央歌壇の情勢、消長を広足なりに把捉した結果であり、当代歌壇の実態が反映されたものともいえよう。

かつて、島崎藤村は『夜明け前』において、青山半蔵に仮託して本居国学を評すこと、

国学者としての大きな先輩、本居宣長の遺した仕事はこの半蔵等に一層光って見えるようになって来た。何と言っても言葉の鍵を握ったことはあの大人の強みで、それが三十五年にわたる古事記の研究ともなり、健全な国民性を古代に発見する端緒ともなった。(注49)

のごとくであった。国学の大成者と称される宣長の学問は「言葉の鍵」すなわち語学に長じたものとして享受されていたこと、文化年間の広足の姿に象徴的であるといえよう。本居国学受容の一端を提示して筆を擱くこととする。

注

注1　博文館、大正十二年。二四一頁。

注2　文政十一――嘉永七年刊、七編十四冊。

注3　桜楓社、昭和五十三年。

注4　揖斐高「『寄居歌談』論――地方からの幕末和歌批評――」（『江戸詩歌論』所収、汲古書院、平成十年）がわかずかに備わるのみである。

注5　「近世文藝」（第八一号、平成十七年一月）所収。

注6　棚町知彌・橋本政宣編『社家文事の地域史』（思文閣出版、平成十七年）所収。

注7　天保十四年刊、七巻七冊。

注8　嘉永元――同七年刊、五編十冊。

注9　初編安政五年・二編文久元年・三編元治二年序刊、三編六冊。

注10　景樹『桂園一枝』所載の九十七首の詠歌に対して、江戸派の秋山光彪が『桂園一枝評』を著し批評を加えたことに端を発する論争。以後、桂園派の中川自休『大幣』を始めとして、両派から数多の論難書が出刊された。

注11　以下の引用文に関しては、私に句読点、濁点、読み仮名を施した。なお、漢字は適宜通行の字体に改め、推敲の甚だしいものは校訂後引用した。

注12　国立国会図書館所蔵。広足手沢本。天保五年刊、一冊。整理番号〈911.158-N321o〉。なお、本書は前掲『桂園遺稿』下巻に『大ぬさ書入』と題して翻刻されており、先の広足宛光輔書簡もまた同翻刻末尾に附載されるものである。

注13　国会図書館所蔵。広足自筆稿本。一冊。墨付十一丁。整理番号〈911.104-N568u〉。

注14　以下、本節の引用は『宇奈為乃須左備』国会図書館本。

注15　寛政十二年成立、文化九年刊、二十巻三十冊。

注16　寛政六年刊、二巻一冊。

注17　『漢書』息夫躬伝「観覧古戒、反覆参考、無以先入之語為主」を典拠とするか。

注18　寛政十年成立、同十一年刊、一冊。

注19　国会図書館所蔵。広足自筆稿本。一冊。墨付三十丁。整理番号〈911.1351-N568k〉。

注20　寛政六――文化九年跋刊、十四巻目録一巻十五冊。

注21　寛政十年成立、四十四巻四十四冊。

注22　安永八年序刊、七巻七冊。

注23　文化十三年奥書、一冊。墨付十四丁。整理番号〈911.104-Ka187o-N〉。

注24　安政七年刊、五巻附録一巻六冊。

注25　寛政四年の補刻本、大本七巻七冊。

注26　宣長の論敵春海もまた、同書に関しては

あるやむごとなき御前に、歌の事などまうしけるに、てにをはのとゝのへはいかゞ心得べきと宣ふめれば、そは伊勢の国人がものせる、こと葉の玉の緒こそよけれ。是にそのゆゑよしはつくせりとて…（春海『琴後集』巻十一「かた糸の序」）

と称賛しており、評判の高さがうかがわれる。

注27　文化五年刊、二巻二冊。整理番号〈815.4-M893k-h〉。

注28　写本一冊。広足晩年の号「田翁」が署名されていることから、同時期の成立と目される。墨付九丁。

注29　広足朱筆書入れは、行書体を用いて表記した。

注30　嘉永六年成立、安政四年刊、二巻二冊。

注31　寛政十一年再版、一冊。

注32　文化十二年刊、一冊。
注33　嘉永七年成立、前編三巻後編二巻五冊。なお、文久元年に前編のみ、明治二十一年に前後編が活版本として出刊。
注34　嘉永二年跋、同三年序刊、一冊。
注35　文政五年成立、文政十二―天保七年刊、三巻六冊。
注36　一巻。天理図書館に自筆本が蔵される。本書の成立に関しては、諸氏により寛政十一年説と翌十二年説に見解が分かれる。
注37　一冊。前掲『稲掛大平に贈る書』と同じく自筆本が天理図書館に収蔵され、寛政十一年、もしくは翌十二年の成立と目される。また、同二書を合写した広足手沢本『平春海歌論消息』が、熊本大学附属図書館寄託永青文庫に蔵される。
注38　周知のごとく、江戸派は古今風の詠歌を庶幾する一方、鈴屋社中、殊に宣長は新古今風を理想とした。
注39　幸文『亮々草紙』（文政四年刊　三巻三冊）所載。
注40　寛政八年成立、同十一年刊、九巻九冊。
注41　文政末年頃成立、一冊。墨付十五丁。
注42　大平書入れは、行書体を用いて表記した。
注43　なお、広足の学統の養子中島広行が著した『さゝぐり』刊本一冊は、鈴門の沖安海が師広足の詠歌を批判したことに対し、反駁を試みた書であり、鈴門と橿園社中の庶幾する歌風の異なることが知れるもの。広行が安海の批言に対して「詞を算盤に置たらむやうにいふ人は、歌の風致はさらにしる事なし」と論難している点、興味深い。鈴門の歌風を道理に過ぎたもの、いうなれば語法のみに執着したものと評していたことが推察されよう。
注44　座談会「近世和歌の伝統と革新」（「国文学解釈と鑑賞」六十一巻三号、平成八年三月）においての白石良夫氏の発言。
注45　国会図書館所蔵。文政年間成立、写本二巻二冊。整理番号〈W119-10〉。
注46　春海『琴後集』巻十三「一柳千古にこたふる書」には「あがたゐの歌のをしへも此人によりてつひにかくれぬべければ」との言があり、宣長が真淵の万葉風の歌論を斥けて新古今風を提唱したことに対し、春海は批判的な姿勢を示していたことが明らかである。なお、日本思想大系四十『本居宣長』頭注に指摘されるところである。
注47　享和元年成立、文化四年刊、一冊。
注48　歌文珍書保存會、大正七年。
注49　引用は新潮文庫本に拠った。

附記　資料の閲覧、及び写真掲載に際して、多大な御尽力、御理解を戴いた鎮西大社諏訪神社に記して厚く御礼申し上げます。なお、本稿は平成二十一年度科学研究費補助金特別研究員奨励費「近世末期国学者の研究―幕末長崎おける文人ネットワークを中心に―」による成果の一部である。

（きら　ふみあき・本学大学院博士後期課程）